

## はしがき

本研究会はエスニック・マイノリティに関心を持つ若手研究者たちによって、2010年11月に設立された。設立の主旨は以下の通りである。

### エスニック・マイノリティ研究会 (Association for Ethnic Minority Studies) 設立主旨

- ネイション、民族、エスニシティなどについての知識を共有しつつ「エスニック・マイノリティ」とは何なのかを学術的に議論していく場を提供する。
- 先行研究に関する知識を共有するとともに、その議論の有効性や各自の研究に対する示唆について考える。
- 各自の研究や外部の講演者の研究から、他地域の実情を把握し、各自の研究に生かす。

## 目次

- 第六期研究会報告 (第五十四～五十八回分)
- 寄稿 (左地亮子／角田延之／北田依利)
- 会員近況
- 新会誌 *ENSG* について・投稿依頼・投稿規定
- 今後の予定

## ■■■ 第六期研究会報告 ■■■

第六期 (2015年8月～2016年8月) には、計五回の研究会 (内訳: 書評会二回、研究報告会二回、研究ワークショップ一回) を開催した。

書評会ではいわゆる「ヴェール論争」を扱う二つの研究書を取り上げ、議論を交わした。このテーマは第七期 (2016年9月～) に開催されるワークショップ (12月) に引き継がれている。また、研究報告会でも北大スラブ・ユーラシア研究センターとの共同研究の開始となる森下報告があった (※この北大との共同研究の詳細に関しては最終ページの「今後の予定」に記した)。これも第七期でも北大との共同研究の枠組みに基づく研究報告会が続いている。

## 第五十四回研究会

(2015年12月12日、於: 早稲田大学)

【ワークショップ】台湾原住民の姓名と身分登録: 過去と現在をつなぐ文化・社会・制度

[共同主催] 科研費 (若手研究 B) 「台湾原住民族社会可視化の影響の複雑性の解明: 戸籍、地図、その記載情報の研究」、同科研費 (基盤研究 B) 「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」、早稲田大学台湾研究所、エスニック・マイノリティ研究会

## 概要

まず主催者を代表して、早稲田大学台湾研究所所長の若林正丈教授 (同大政治経済学術院) が開会の挨拶を述べた。続いて、笠原政治教授 (横浜国立大学名誉教授) の紹介によって、林修澈教授 (国立政治大学原住民研究センター・センター長) による特別講演が行われた。林教授の講演は「伝統的命名と人名登記」と題するもので、原住民の伝統的命名についての研究成果をふまえて人名登記の現状をめぐる問題について解説、その解決策をめぐる理論的提言が行われた。講演の豊富な内容に刺激を受け、会場の要望に応じて、予定になかった質疑応答の時間を設け、参加者から多くの質問が寄せられた。

お昼休みをはさんで、「台湾原住民と文化」をテーマにしたワークショップ第一部が行われた。野林厚志教授 (国立民族学博物館) による「台湾ヤミ族の名制と社会関係」、森口恒一教授 (静岡大学名誉教授) による「言語の発生から見た台湾原住民の『なまえ』」、黄季平准教授 (国立政治大学) による「国立政治大学『原住民族伝統姓名登記』プログラム」が発表された。笠原政治教授はルカイ族とプユマ族の事例を補いつつ、伝統姓名についての理論的な指摘を行った。春山明哲客員上級研究員 (早稲田大学台湾研究所) からは、霧社事件関連の史料に記録された原住民の人名の歴史的

社会的意義について解説があった。

「身分登録と姓名」をテーマにした第二部は、松岡格准教授（獨協大学）による「台湾社会の可視化とエスニシティ・姓名」、イワン・ナウィ研究員（中央研究院）による「セデック族の人名表記」、宮岡真央子准教授（福岡大学）による「ツォウの姓名の過去と現在」が発表された。清水純教授（日本大学）からは姓名の漢族化、清朝時代の原住民姓名の状況についてコメントがあり、若林正丈教授からは国家による可視化プロジェクトについて理論的整理・考察が示された。

本ワークショップには研究界の重鎮、気鋭の中堅研究者、若手研究者、大学生とさまざまな参加者が出席し、かつ議論に参加した。今回のワークショップでは企画者の用意したトピックについて活発な議論が行われたが、それだけに止まらず、発表内容および参加者やコメンテーターの指摘により、新たな発見もあった。これからの原住民研究の発展に寄与するものと思われる。この発表内容は、いずれ論文集の形にまとめる予定であるので、上記講演・報告・コメントの詳細はそちらをご覧ください。

（松岡 格）

### 第五十五回研究会

（2016年2月6日、於：獨協大学）

【研究報告】米国とエスニック・マイノリティ

：黒人を記念する道の名付けを事例に

〔担当〕北田 依利

（東京大学大学院総合文化研究科）

#### 概要

20世紀後半以降、法的な人種差別が禁止された米国において、公共の場でマイノリティを記念する動きが盛んになっている。中でも黒人の個人の名前を道や学校などの名前につける／改名するという現象に着目し、こうした先進的な変化の社会

的政治的意義と、多様性の称揚が差別の温存や強化と共振している逆説に関心を持ってこれまで研究を行ってきた。

本報告では、地図や写真などを交えながらニューヨーク市の昨今の状況について分析を呈示した。とりわけ、従来のような英雄の記念ではなく人種主義的暴力に異議を唱える目的で起こった改名の事例と、歴史を掘り起こそうと近年市内でいくつもの改名を成立させている公共史家の影響について論じた。様々な地域の専門家との議論を通して、どこかつかみ所がなく、しかし既存の分析枠組みを揺さぶる地名研究の可能性に改めて気づかされた。今後も人種、境界、記念行為を軸に、マイノリティをとりまく社会を検証したい。

（北田 依利）

### 第五十六回研究会

（2016年3月10日、於：獨協大学）

【研究報告】外国人・難民政策を通して見るチェコスロヴァキア第一共和国(1918-1938)の建国—「民主主義の共和国」再考と研究動向—

〔担当〕森下 嘉之 （茨城大学）

#### 概要

本報告は、第一次世界大戦後に建国されたチェコスロヴァキア共和国へのポーランド避難民流入問題を、同国政府の政策すなわち「受け入れる側」に焦点を当てて考察した。具体的には、ポーランドから避難民が流入する経路にあたるチェコスロヴァキア国内チェシン地域の状況に着目して、難民団体「チェシン及びポーランド避難民組織（1921年設立）」の活動とチェコスロヴァキア政府の対応策を分析した。第一次世界大戦後の混乱期において、「チェコ人難民」「外国人難民」の概念が、1920年代において形成途上にあったことが示された。研究会上では、新国家チェコスロヴァキアの「外国人」政策における包摂と排除の諸相

を見るためには、建国当初の難民送還政策に加えて、同国における「外国人」に関する個別の法を検討する必要性が指摘された。また、今後の研究プロジェクトへの発展として、避難民など越境する「人」に加えて、「空間」の変容過程を考察する必要性も指摘された。

(森下 嘉之)

### 第五十七回研究会

(2016年6月19日、

於：東京外国語大学海外事情研究所)

【書評】ジョン・W・スコット『ヴェールの政治学』  
書誌情報:

ジョン・W・スコット著『ヴェールの政治学』(李孝徳  
[監訳]、みすず書房、2012年)

[担当] 松岡 格 (獨協大学)

森下 嘉之 (茨城大学)

北田 依利

(東京大学大学院総合文化研究科)

### 概要

フランスのヴェール問題について論じた代表的著作『ヴェールの政治学』について、松岡(序章～第二章)、森下(第三章・第四章)、北田(第五章・第六章)が紹介・評価を行った。

2004年にフランスでヴェールの着用を制限する法律が成立した。法律の表現は公立学校で宗教的帰属を誇示的に表徴する物を着用することを禁止するというものであるが、スコットによればこれはムスリムの少女がヘッドスカーフを身につけることを禁止するものであった。

スコットはなぜヘッドスカーフが禁止の対象、論争の対象となってきたのか、なぜフランス社会にとって許容しがたいものになっているのかを、フランスの歴史と政治的状況にあわせて解説している。それぞれ章のタイトルとなっている「人種主義」「世俗主義」「個人主義」「セクシュアリティ」

が分析のキーワードになっている。これらの側面が複雑にからみあって論争とその背後にあるフランスの問題が構成されているというスコットの指摘は説得力を持っている。こうした「宗教的」実践と共和主義の対立についての的確に整理されているのはもちろんのこと、植民地統治まで遡って人種主義の「伝統」を析出している点は本書の重要な貢献ではないだろうか。

研究会上の討議において、今後につながるトピックも生まれた。本書で提示されたテーマや論点は2016年12月に開催予定のワークショップでも引き続き議論する予定である。

(松岡 格)

### 第五十八回研究会

(2016年8月5日、於：獨協大学)

【書評】クリスチャン・ヨプケ『ヴェール論争』

書誌情報:

クリスチャン・ヨプケ著『ヴェール論争』(伊藤豊・長谷川一年・竹島博之[訳]、法政大学出版局、2015年)

[担当] 栗林 大

(中央大学社会科学研究所)

香坂 直樹

(跡見学園女子大学)

重松 尚

(東京大学大学院総合文化研究科)

辻河 典子 (近畿大学)

JA 日下 (新潟大学)

### 概要

本書は、近年西欧諸国で頻発する主流派国民とムスリム移民との文化的な衝突を、ムスリム女性が着用するヘッドスカーフ(=ヴェール)を巡る議論をモチーフに、英仏独三カ国の比較政治として考察している。著者は、ムスリムのヘッドスカーフは、ヨーロッパの人々に対していわば「アイデンティティを映し出す鏡として機能」している

とする。したがって、ヨーロッパ共通の価値観としてのリベラリズムに対して、ヘッドスカーフはあくまでそれへの「挑戦」として位置づけられる(第一章)。フランス共和主義の下でのライシテ論争(第二章)、ドイツ憲法裁判所の判決とその余波(第三章)、イギリス多文化主義における宗教の扱いの変容(第四章)は、いずれも政治文化や国民性に沿って形態こそ違えど、両者の相克の現れとして捉えられる。最後に、著者はそこから「最善の実践形態」を汲み取ろうとする(第五章)。

各章報告の後、J・スコット『ヴェールの政治学』との比較を中心に活発な討議が行われた。スコットに対して、ヨプケはヘッドスカーフのもつ多義性を認めておらず、ムスリム女性にとってのジェンダー的視点に基づくその意味合いを退けている。また、マイノリティ側の論理の体系性や多様性を顧慮していないとの指摘が寄せられた。彼の視線は一貫して、西欧諸国におけるリベラルなマジョリティの異文化受容の可能性とその限界に注がれている。やがて『軽いシティズンシップ』へと至るヨプケの議論を理解するための一つの補助線として重要な一冊である。

(栗林 大)

## ■■■寄稿■■■

第六期の書評会(第五十七・五十八回研究会)では、上記の研究会報告にもあるように、ヨーロッパ諸国における「ヴェール論争」を題材にした二つの研究書を取り上げた。書評会では、「ヴェール論争」の中心的な舞台であるフランスにおけるマイノリティ管理体制が議論の俎上に載せられた。

書評会の後、フランスの「ジプシー」を研究対象にする左地亮子さんからこの点に関する情報提供をいただいた。そのうえで、今回のニューズレターを作成にあたり、改めて左地さん、そしてフランスの共和主義に詳しい角田さんに論考を記していただいた。

また、米国で在外研究中の北田さんからは、2016年11月のアメリカ大統領選挙の意味について、マイノリティ研究の成果を踏まえた所見をお寄せいただいた。

共和制とマイノリティという点で左地さんと角田さん、北田さんの議論は絡み合い、新たな視覚と問題を提起している。

(編集より)

\* \* \*

## フランス共和主義とマイノリティ —『ヴェールの政治学』と「ジプシー」を めぐって—

左地 亮子

(日本学術振興会)

今年(2016年)の夏、フランスでは新たなヴェール論争が生じた。ムスリム女性が公共の場で泳いだりスポーツをしたりするために考案された、全身(顔と手足を除く)を覆った水着「ブルキニ」をめぐるもので、ブルキニの着用が、ヘッドスカーフ同様に、男女平等や個人の自由を重視するフランスの普遍的価値に相いれない振る舞いとして問題視されたのだ。共和国のシンボル「マリアンヌ」に触れ、胸を露わにすること(身体の可視性)が自由(解放)のシンボルだと述べたヴァルス首相の発言は、スコットが『ヴェールの政治学』で述べていた内容を踏襲する。本書においてスコットは、ヴェールを引き合いに出してイスラームを批判する風潮は、共和国の矛盾(女性に対する歴史的な排除や現実に残る差別、そもそも肌の露出を女性の解放と同一視する観念…等々)を覆い隠したまま、「伝統的で専制的なイスラーム」と「近代的で開明的なフランス」を安易に対立させていると指摘する。

スコットは、スカーフを被ることを選択する少女たちの個性や自己決定権(そしてフランスの

ムスリムの現実には高い社会文化的な統合レベル)を否定し、そこに共同体主義(共和国の統一性を脅かす分離主義)の危険性を重ねる言説の根幹には、根深い人種主義が潜んでいるという。この指摘には、「ジプシー」と呼ばれるフランスのマイノリティを研究する筆者も同意する。彼らも常に「共同体主義」の傾向を指摘され、「フランス社会に統合されることを望んでいない」人々だともいわれる。それはフランスのジプシーがキャンピング・トレーラーに暮し、移動生活の伝統を保持していることを主たる背景とするが、実態は全く異なる。現在、彼らは、'gens du voyage' (= (旅の人々) という名で呼ばれているが、近年の当事者運動の中では、エスニシティではなくシチズンシップを強調し、'Citoyens Itinérants' (移動生活を行う市民) と名乗る人たちもいる。フランスのジプシーは数世代にわたり、フランス地域社会内部に根付いて暮らしてきた人々で、「自分たちはフランス人だ」という意識を強くもつ。そうした歴史的、社会的背景にもかかわらず、異なるライフスタイルを保持するがゆえに、フランス社会に統合されざる特定の集団=二級市民として差別化されることを彼らは批判するのである。

事実、筆者の調査地では、ジプシーの居住地を彼らの文化的伝統に配慮した方法で改良するという目的で、ジプシーたちの新たな「共同体=ゲットー」が作られようとしている。当のジプシーたちは、大集団で町外れの居住地に閉じ込められる(=隔離)のではなく、個々の家族の小さなまとまりにわかれて、一般の市民たちが暮らす町中の居住区に分散して住まうこと(=融合)を希望していたにもかかわらず、である。ここで生じているのは、フランスが共和国の統一性を脅かすものとして恐れていたマイノリティによる共同体主義ではなく、主流社会によるマイノリティの「共同体主義化」ともいうべき状況である。

多文化主義の限界が意識される現在、フランス共和主義の統合モデルから学ぶことは多いと筆者

は考える。しかし、ムスリムやジプシーというフランス市民が訴えるように、まずは共和国内部の矛盾とそこで巧みに覆い隠される人種主義や差異主義を捉えること、またフランス以外の社会にも共通するが、「普遍性を志向する市民社会」と「差異を主張するマイノリティ共同体」という対立的な構図を今一度問い直すことが重要となるだろう。

\* \* \*

### フランスにおけるスカーフ問題と 普遍主義／多文化主義

角田 延之  
(四日市大学)

フランスの公的施設(例えば公立中学校)におけるスカーフ着用禁止は、私見ではムスリムへの差別であるように映る。だがフランスおよびヨーロッパにおいては、このスカーフ問題をめぐって激しい議論が続いてきた。研究会で取り扱われたスコットとヨプケの著書はその集成といえよう。これら以外にも細かい議論はあるであろうが、筆者はそれらを追うことは到底できていない。全ての議論を理解すれば、あるいは筆者の私見は覆るかもしれない。だが現在のところ、その段階には至っていない。

フランスの普遍主義と、多文化主義との溝は深いように思われる。それはカナダのウィル・キムリッカ(Will Kimlicka, 1962-)の議論に対するドミニク・シュナペール(Dominique Schnapper, 1934-)の主張に明らかである。まずシュナペールは、ある集団に特別な権利の主張は共同体主義(communautarisme)の危険を有しており、特別な集団を公認することは特殊主義、共同体への自閉、社会の断片化に通じるとする。そしてこれらとは異なる穏健な議論として、キムリッカの主張を要約する。特別な集団的存在を公認する条件には、個人の集団への出入りが自由であること、集団の

内在的規範が当該社会の内在的価値観と衝突しないこと、集団間が平等であることがある、と。シュナペールによれば、キムリックが目指すのは、より真正でより効果的で、より民主的な多元的統合であり、彼女はそれを支持する（以上、シュナペール 2012 : 240-244）。だが、シュナペールはまた、先住民と英仏 2 種類の創設者たちと移民社会を抱えたカナダの多文化主義はフランスのような単一ネーションにおける多文化主義とは性質が異なるとも述べている（同上 : 248-249）。彼女のこの言明は筆者に、フランスとカナダの、そして普遍主義と多文化主義の隔たりを見せつけずにはいない。

フランスは単一ネーションの国であろうか。筆者はそうは思わない。だが、筆者がすぐに思いつく程度の反論はシュナペールも想定済みであろう。かくして、普遍主義や多文化主義についての議論を見る時、筆者はその深さに感じ入ると同時に、ある種の諦念に見舞われる。そしておそらくフランスにおけるムスリムのスカーフ問題も、諦念を乗り越えた者のみが、議論の方向性を変えることができる性質のものなのであろう。筆者は日本でその役割を担うことができるのは、エスニック・マイノリティ研究会をおいて他にないと考えるが、過言であろうか。

### 参考文献

ドミニク・シュナペール著『市民権とは何か』（富沢克・長谷川一年〔訳〕、風行社、2012年）（原書 2006年）

\* \* \*

## 2016 年米国大統領選挙について

北田 依利

（東京大学大学院総合文化研究科）

11月8日火曜日の選挙の結果を受けて、全米はおろか世界に衝撃が走った。「エスタブリッシュメントの敗北」「地方の労働者の怒り」といった単純な分析を、マスメディアや知識人が量産していることに筆者は驚愕し大変落胆している。こうした分析の中には説明なしに労働者が白人男性であることを前提として解説を進めるものがあり、非白人や女性の労働者を忘れる・排斥するという視野の狭さを露呈している。あるいは、白人男性労働者と明記するものもあるが、こうした分析も表面的で、現実を歪めてすらいる。統計は常に真実を語るわけではないが、それでも巷にあふれる投票の統計を見れば、上記のようなストーリーでは説明できないことは明白だ。少し細かく見てみたい。

主要ニュース・メディアの一つである『CNN』によると、白人は男女ともに半数以上が共和党（トランプ）に、黒人、ラティーノ、アジア系の男女は少なくとも 63%以上が民主党（クリントン）に投票しており、人種が大きく作用していることが明らかである<sup>1</sup>。

- 「初の女性大統領」誕生を前にジェンダーが投票行動の分水嶺になるかと思われたが（米国で女性蔑視が根強いことも関係している）、最もクリントンを支持することが期待されていた白人女性の 52%がトランプを支持した。いっぽう、非白人女性は大多数が、黒人女性に至っては 94%がクリントンに投票していた。
- 学歴の低い（白人男性）労働者がトランプを支持しているというイメージが流布しているが、教育水準はそれほど関係ない。大卒の白人の中にもトランプを支持した人が多くおり、

<sup>1</sup> “2016 Election Results: Exit Polls,” November 23, 2016, <http://www.cnn.com/election/results/exit-polls>.

彼らの中にもエスタブリッシュメントがいるはずである。

- 収入もあまり有効な指標とはいえない。年収別のデータでは、共和党と民主党はおおむね拮抗している。「労働者の怒り」というイギリスのEU離脱でも聞いた神話は、トランプを選んだ富裕層・中産階級の白人を不可視にするための煙幕として機能してはいないだろうか。
- 保守的な地方対リベラルな都市という構図も必ずしも正しくない。州別の地図では見えないが、都市部にもトランプ支持者はいる。富裕層が住み始めた都市の居住区では、地価上昇のために元の住民が住めなくなり人口動態が変わってしまう、ジェントリフィケーションという現象が近年指摘されている。ニューヨーク市の地図を見れば、ジェントリフィケーションで有名なブルックリンの二つの地区で共和党が勝利していた<sup>2</sup>。庶民には手が届かない住宅に住み、都会で洗練された暮らしを送るトランプ支持者は、エスタブリッシュメントではないのだろうか。

このように、投票の統計は白人を中心にしながら様々な階層・地域の人々が共和党を支持した事実を伝えている。それでも、投票者の半数以上は民主党を選んでいて。

またこうした単純な分析は、仕事のなくなった白人男性の怒りにも一理あるといった論調によって、非白人の男女、特に女性がこれまでもずっと経済的に不利な立場に置かれてきたことを不可視にする。怒りを汲み取ってもらうことができる白人男性とは対照的に、非白人女性の怒りや悲しみ

<sup>2</sup> Tanveer Ali, "How Every New York Neighborhood Voted in the 2016 Presidential Election," *DNAinfo New York*, November 9, 2016, <https://www.dnainfo.com/new-york/numbers/clinton-trump-president-vice-president-every-neighborhood-map-election-results-voting-general-primary-nyc>.

は無視されたままである。そして単純な言説は、人種やジェンダーの権力構造をほとんど問わないままに状況を容認し、かつ「狂信的な」地方の(白人男性)労働者に白人至上主義の責任を押し付ける。

選挙の後、人種、宗教、性的指向などに基づく差別がマイノリティへの暴力として噴出している。マイノリティが必ずしも民主党を手放して支持したわけではない。人種マイノリティは、非白人の大量投獄に加担したクリントン夫妻に複雑な思いを抱いてきた。彼らはまた、居住区を単位とした不平等な選挙制度のために、投票所へのアクセスが限られる傾向にあった。それでも、断腸の思いで民主党に投票したマイノリティに、選挙結果のしわ寄せが及んでいるのである。いっぽう、クリントン、トランプのいずれも大統領としてふさわしくないとして選挙を棄権した人たちや、選挙後にカナダや海外への移住を検討する人たちの中には、選挙結果の影響を受けない白人が少なくない。選挙後の状況を仕方がないと受け入れる余裕があるのも、マジョリティゆえの特権である。人種主義をはじめ米国のあらゆる差別は、トランプ支持者の代表とされている地方の(白人男性)労働者以外の人々にも支えられてきたことを強調しておきたい。

こうした不均衡を見つめる必要性が、今回の大統領選挙でより明らかになった。ムスリムや書類のない移民、非白人など直接被害を受ける人たちだけでなく、白人も身分の保障された外国人もたくさん抗議の声を上げている。マジョリティの中にも、自身のコミュニティ内の他のマジョリティに対しマイノリティにしか見えない現実を説明し、目の前で起こっている差別や暴力に介入するという役割を果たそうという人がいる。

危惧されているような「米国の分断」はこれまでもずっと存在していたものだ。マイノリティが直面してきた圧倒的な不均衡が認識されることで、分断が解消に向かうことを願っている。



11月16日、選挙結果を受けてニュージャージー州ラトガーズ大学で行われた抗議行動。全米に見られるこうした行為に冷ややかな意見もあるが、こうした行動もまた民主主義である。デモに対して、当日はトランプ支持者の学生も姿を現した。(撮影：北田)

## ■■■ 会員近況 ■■■

今年(2016年)はリュブリャーナとプリシュティンで、それぞれスロヴェニア語とアルバニア語の夏期講習に参加した。参加者は主として当該言語を学ぶ学生あるいは研究者か、北米に移民した当地出身者の子孫等であったが、イタリアにおいて同系言語を話すマイノリティ出身者も参加していたのが印象的だった。わけても、北部フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア自治州ウーディネ県レージア谷で話されているという「レージア語」は、寡聞にして存在自体を聞いたことがなかった。スロヴェニア語の方言と位置づけられているようだが、辞書を見せてもらったところかなり異なった言語であるように見える(その受講生は標準スロヴェニア語に戸惑っていた)。もちろん話者人口は極めて少なく、その受講生も単語等はわかるが流暢に話せるわけではないという。コソヴォで出会った南部のアルバニア系マイノリティであるアルブレシュの受講生たちは概して流暢にアルブレシュ語と標準アルバニア語を話しているようだった——ようだった、というのはわたしが「こんにちは」程度のアルバニア語しか知らなかったからだが、もちろん中にはイタリア語しかわからない人もいた。東欧のエスニック・マイノリティの多様性と、彼らが晒されている危機を実感できた夏だった。

(中澤 拓哉)

\* \* \*

「森下プロジェクト」の一環で2016年9月にスロヴァキアを訪問し、ブラチスラヴァの大学図書館と国立文書館で史料収集を行った。折悪しくも(?)、2016年下半期はスロヴァキアが欧州理事会の議長国を務めており、まさに自分の滞在時期にブラチスラヴァで非公式の欧州理事会が開催された。EU諸国の首脳がブラチスラヴァに会し、難民や移民の問題を協議した。しかし、2015年秋と同様、市内で難民/移民の姿を目にする機会は

なかった。さらに欧州理事会の当日は、警備の都合上、ブラチスラヴァ市内の各種機関や企業、店舗の多くが政府の要請に応じて休業したため、市民の多くはこの日を予期せぬ休日として消費したように思える。期せずして、昨年とはまた異なる形で、いわゆる「難民問題」の政治上の深刻さと市内での肌感覚との落差を感じる機会を得た。

(香坂 直樹)

\* \* \*

第五十七回研究会に備えて外出先で『ヴェールの政治学』を読んでいた時、イスラーム教の実践を人種主義的な視点から評した会話を偶然耳にした。その視点はまさに同書で指摘されていたものだ。『ヴェールの政治学』を手に行っている責任を感じながらも、人種主義的な発言だけでなく女性差別的な発言も行う彼らを前に、私は何もできなかった。それ以来、教育に携わる者として、研究会で得た知見のより良い生かし方とは何かを考えている。

(辻河 典子)

\* \* \*

2016年10月、社会思想史学会において共通論題「リベラル・ネーションと多文化主義の『倫理』」に報告者として登壇する機会を得た。新自由主義の浸透という構造的な背景を批判的に捉えるべき共通認識としつつ、なおネーションという枠組みからもたらされる公共的な基盤について白川俊介氏（関西学院大学）が報告、批判に晒されている多文化主義の再構築の可能的な道筋について栗林が報告を行った。昨年、編著『奇妙なナショナリズムの時代』を上梓した山崎望氏（駒澤大学）にコメンテーターを担当して頂き、論点の集約された密な議論の交わされるセッションとなった。私自身、報告を構想するにあたって、リベラル多文化主義の把握に際して当研究会でのキムリッカやヨプケの著作をめぐる多角的な議論に大いに啓発されたことをここに付記したい。

(栗林 大)

## ■新会誌 *ENSG* について■

### 【新会誌 *ENSG* の趣旨】

2010年11月の発足以来、エスニック・マイノリティ研究会は、多様なディシプリンから様々な地域や集団の事例を扱う研究者が集う場という特性を活かし、議論を交わしてきました。

また、ワークショップやシンポジウム、ニューズレターを通じて、外部にも研究会の活動成果を外部に発信してきました。

このような研究会の活動を今後もさらに強めるため、EMS研究会では新会誌 *Ethnicity, Nation, State, and the Globe: Ethnic Minority Studies (ENSG)* / 『エスニック・マイノリティ研究』の発行用意を進めています（※2017年8月に第1号を発行する予定）。新会誌の目標は次の二点です。

- ① 研究会の会員全員が一堂に会する場をなかなか得られない状況にあっても、会員間での議論と交流の場を提供すること。
- ② 会員の多彩な研究成果をより広く発信すること。反対に言えば、研究会外の様々な人々が私たちの研究成果を知る機会を作ること。

### 【新会誌の編集方針】

この目標を基に、編集委員会（香坂、松岡、遠藤、JA 日下、栗林）で新会誌の概要を議論し、その結果、以下の編集方針を決定しました。

- 新会誌は年に1回発行する。（夏～秋に発行）
- 従来のニューズレターは新会誌に統合する。
- 査読制は採用しない。  
（※編集も誤字の訂正など最小限に留める。）
- 研究報告の場であると同時に、外部への発信の場であることを意識し、様々なカテゴリーの論考や記事を掲載する。
- 新会誌に投稿・執筆できる人物は研究会の会員及び会員が推薦・紹介した人物に限る。
- 当面は研究会ウェブページからダウンロードする方式で発行・公開する。

【新会誌への投稿依頼】

以上の趣旨と編集方針を踏まえ、会員各位から新会誌 ENSG の原稿を募集します。皆さまの積極的な参加を期待します。

(※この他、企画原稿や研究会報告などの執筆を編集委員会から依頼することもあります。)

【ENSG 第 1 号の投稿規定】

■エントリー締切：2017 年 3 月末

→投稿カテゴリー・予定枚数を編集委員に連絡

■原稿提出締切：2017 年 6 月末

■基本の投稿カテゴリー

【400 字詰め原稿用紙換算での標準枚数】

- (1) 論文・研究ノート【30 枚程度から】
- (2) インタビュー・資料紹介【20 枚程度から】  
(※長くなる場合は編集委員会と要相談)
- (3) 翻訳【原典次第、編集委員会と要相談】  
(※著作権等に関しては投稿者が責任を負う)
- (4) 新刊紹介・書評【5 枚程度から】
- (5) エッセイ (近況・留学・在外研究報告、場所・出来事のレポート、情報提供など。ニューズレター近況報告の拡大版)【10 枚程度から】
- (6) その他 (上記にないが投稿者が会員内外に紹介したい内容。)  
【編集委員会と要相談】

■投稿原稿は MS Word の.docx(.doc)形式で提出する (注は脚注形式で付ける)。

■投稿言語は基本的に日本語とするが、外国語原稿も受け付ける。

■タイトルと要旨・アブストラクト

- (1)論文・研究ノート、(2)インタビュー・資料紹介、(3)翻訳の投稿原稿のカテゴリーで、本文が「日本語」の場合、英語タイトルと外国語でのアブストラクトを原稿に添付する。
- (1)・(2)で本文が「外国語」の場合は、日本語タイトルと日本語要旨を原稿に添付する。

■写真・図版、翻訳の原典などの著作権や肖像権については投稿者自身が予め確認する。

■■■今後の予定■■■

第六期研究会報告の冒頭にも記しましたが、2016 年 4 月より北大スラブ・ユーラシア研究センターの「プロジェクト型」共同研究として、森下さんが申請した『東欧の「境界 (ボーダー)」における領域性・空間認識の比較研究—チェコスロヴァキアおよびハンガリーを事例に—』を EMS 研究会の活動として進めています。

これを受けて第七期の前半では「森下プロジェクト」の研究報告会が集中して開催されています。次回 2017 年 1 月 8 日 (日) の研究会では、香坂と中澤が研究報告を行います。

そして、共同研究のまとめとして、2017 年 3 月 5 日 (日) に北海道大学でワークショップを開催します。詳細が決まり次第、メーリングリストなどを通じて告知します。

\* \* \*

開催順が前後しますが、松岡さんの企画で 2017 年 2 月 10 日 (金) に西南民族大学彝学学院と獨協大学との国際共同研究の成果報告シンポジウムが開催されます。こちらの企画にも積極的な参加をお願いします。

\* \* \*

前頁でも紹介したように、2017 年 8 月に新会誌 *Ethnicity, Nation, State, and the Globe: Ethnic Minority Studies (ENSG)* / 『エスニック・マイノリティ研究』の第 1 号を発行するべく編集委員会で用意を進めています。この新会誌がどのような内容になるか、どのような性格を持つかは、投稿原稿と企画原稿の集まり方次第であり、まだまだ未知数のところが多く残ります。ただ、まずは、会員の研究成果を研究会内外に発信する場所を作りたいと考えています。会員の皆さんの積極的な投稿・参加をお願いします。

『エスニック・マイノリティ研究会  
ニュースレター』 No. 6  
2016年12月20日発行

責任編集：

香坂 直樹

発行者：

エスニック・マイノリティ研究会

幹事連絡先：

〒340-0042

埼玉県草加市学園町 1-1

獨協大学国際教養学部

松岡 格

**E-mail** [songgangge@gmail.com](mailto:songgangge@gmail.com)

**URL** <https://sites.google.com/site/emstudies/>